祖暁禅師画像　（秀道院所蔵）

平安の祖暁禅師

甲斐の祖暁禅師について

天巖祖暁禅師は、都留郡宝村字大奈良（都留市金井）の出身で、近世における傑僧として宗教界は勿論、広く社会にも知られております。

かって禅師については、高橋竹迷師（故人）が『中央仏教』の昭和十一年七月号で、又清水玄透師が『大法輪』の昭和三十六年十月号に、それぞれ貴重な研究を発表いたしました。

禅師はいつも「甲斐の祖暁」と名乗って郷土のことを忘れなかったが、禅師に関する諸資料は、江西院、法泉寺など関係寺院の火災などによって皆無の状況であるのは誠に残念です。

わずかに書などの軸物が、町家に保存されているのがせめてもの幸です。

高橋、清水両師についての調査は、静岡市深谷山秀道院の銅碑文や、同寺保存の文書によるところが多いようです。

昭和のはじめ、都留市上大幡の故安田厚氏、南都留郡道志村の故池谷源一氏両県議が中心となり禅師の顕彰に努力されました。

禅師が七歳で得度してから今年で丁度三百年になりますので、禅師と郷土との関係を重視しながら、三度禅師の足跡を尋ねてみたいと思います。

祖暁禅師の得度

都留市金井にある千が坂鉱泉の横から大月市初狩に通ずる江戸時代からの旧街道があります。

この道を鉱泉から初狩に向って約三百メートルほど歩いて右に横道を下ると、桂林寺山（後山ともいう）と、

その後の御殿山の沢間にそった農道に通じており、更に東に進むと大奈良山の裾に連っております。

昔ここに十数戸の大奈良部落があり、また部落の人々は農業に従事していましたが今は部落の跡形もなく、当時部落にあった薬師堂の本尊薬師如来が、桂林寺に移され、安置されてあります。

禅師は寛文七年（一六六七）十月二十二日、この大奈良（当時金井は宝村に属す）の佐藤家の二男として生れ、幼名を太郎といいました。

禅師が七歳で仏門に入ったことについて考察してみたいと思います。

禅師出生の地宝村は、都留郡領主小山田氏が、天文元年（一五三二）冬、谷村（都留市）に館を移すまで約四百年間都留郡の中心として繁栄した地域です。

小山田氏の祖先が、鎌倉幕府の御家人であった関係もあり、宝地区には大幡山広教寺、大儀山長生寺など数多くの曹洞宗の寺があります。そのうち広教寺は鎌倉将軍源頼家の命によって創立されたといわれ、《本堂にある磬子に、元弘元辛未年（一二〇四）八月上旬と刻まれてあります。》はじめ建長寺の末寺でありましたが、後曹洞宗となり、金沢（石川）大乗寺の末寺となりました。

かって徳翁禅師（祖暁禅師の師）の師にあたる大乗寺の月舟宗胡禅師がこの寺に錫杖を留めて、大いに禅風を鼓吹されました。

総門の額「大幡山」の文字は月舟禅師の筆になるものであります。

又禅師が七歳の時一山徹公について得度した同村千眼山江西院（曹洞宗）の開山は一道光円禅師で、光円禅師は大儀山長生寺の実の開山にもなります。同村向富山用津院（曹洞宗）の開山鷹岳宗俊禅師（中巨摩郡亀沢の天沢寺の開山でもあり、明応年間小山田越中守信有の祖父にあたる小山田信長号耕雲の招聘による）は光円禅師の師にあたります。

このように祖暁禅師が得度するについては、大幡川にそった宝地区は昔から曹洞宗の名刹が多く、又すぐれた

名僧知識が在住していたので、その影響をうけていることが考えられます。

しかし仏門に入った直接の動機としては、禅師の法話の中に「老僧七歳の時、水辺において、多数の螢を殺して生仏一如の根源を識得してより、文字、言句、誦経、都て要とせず、只樹下石上、或は唯房に在って兀坐（きちんとすわること）考究すること二十年云々」と述べております。

大奈良の沢には当時初夏ともなると螢が群をなして飛び交うていたことでしょう。太郎が七歳になった夏の夜この沢のほとりに点滅する螢の光を見て不思議に思い、多くの螢を殺してその原因を究明している間に生と死について疑問をいだき、翌日金井の桂林寺住職の宵外和尚（相外祖景の誤りか）をたずねました。

太郎の疑問について和尚が説教したところ、太郎は悟るところがあったので、和尚は太郎の生れながらの非凡な才能に驚いたとのことです。

禅師が長じて夏の夜空に飛ぶ螢を見て昔を省みて投じた句に「ぽつぽつと暗に穴あく螢かな」があります。

太郎はその後仲間が集って楽しく遊んでいる時でも、何ものかにとりつかれたかのように一人じっと考えていることが多くなりました。

間もなく金井の江西院の一山徹公のもとで童髪を落して仏門に入りました。

得度後徹公和尚は、太郎に経学書を学ばせようとしましたが、法話の中にもありますように、そのことには熱を入れず、ひたすら坐禅し、考察することに専念しました。

桂林寺山の裏山にあたる御殿山に御殿岩とよばれる岩場があり、その岩の中に祖暁禅師が坐禅修行した「祖暁の坐禅石」が今もあります。

昔岩の近くに堂宇があり、禅師はここに起居して修行したとも伝えられております。

祖暁禅師の足跡

禅師は、元禄元年（一六八八）二十一歳の時、加賀の大乗寺の徳翁（独翁ともかかれてある）良高禅師について参禅修行しました。

静岡市深谷秀道院にある祖暁禅師の碑銘によりますと、加賀の大乗寺から更に行脚して播磨（兵庫）の竜門寺に盤珪禅師をたずねて臨済禅に参じ、次に嵯峨（京都）の直指庵の独照禅師について黄檗禅を学びました。後尾張（愛知）の長福寺（黄檗宗）の千丈禅師のもとで参禅しました。

元禄五年禅師は、得度の師（授業師）である金井江西院の徹公和尚が老齢となったので孝養をつくすためにと都留郡に帰り、元禄七年上谷村（都留市）大道山法泉寺に第八世住職として入院しました。当時は寺も平僧地で荒れはててておりましたが、禅師を法泉寺中興の開山とあがめて、禅徳の広まるにつれて檀家も増え、善男善女の参詣者も多くなり、禅師の時から又法地となりましたので、禅師を法泉寺中興の開山とあがめております。

元禄十三年禅師が三十四歳の時、東都（江戸）において徳翁良高禅師より印可（弟子に奥義を授ける）を受けて嗣法し、宝永三年（一七〇六）師の席をついで江西院の住職となりました。

江西院に在住中は、曹洞禅を高揚して一般大衆に信仰の道を解いて教化に努めました。又地方寺院の住職や、路行く雲水に対しては、いつも竹棒を担って街頭にたち問答をしかけるので、僧侶は縮みあがったとのことです。

正徳元年（一七一一）秋、相模（神奈川）愛甲郡荻野村松石寺の住職として転住しました。

その後正徳四年駿河（静岡）安部郡の領主本多信門（式部、太郎左衛門、百助）の招きにより、安部川のほとり藁科村字深谷の深谷山秀道院（前名心光庵）の開山となりました。

享保八年（一七二三）八月、禅師は井伊家七代直惟公の招聘に応じ、信門の配慮もあって、井伊家の菩提寺である彦根（滋賀）の清涼寺の住職となりました。

井伊家は徳川譜代の三十五万石の大名で、清涼寺歴代の住職は、その権勢から全国より一流の名僧知識を招聘

しておりました。

禅師が同寺第八世の住職として迎え入れられたことは、禅師の名声が広く世の中に知られていたからです。

清涼寺に居ること三年、享保十一年（一七二六）三月禅師は同寺を退去して秀道院に戻りました。理由は藩主直惟公と諸事意見が合わなかったのではないかといわれております。

秀道院の文書に、「伊吹山いつ来て見ても伊吹山甲斐の祖暁は是れ見てくれい」という狂句がありますが、これは禅師が清涼寺を去って伊吹山の辺を過ぎる時、昨日は藩侯の師、今日は一介の衲（雲水）、山色古今なし、人間（人生）の盛衰ある意をうたったものであります。

透道院に帰った禅師は享保十一年一度甲斐に戻って大衆を教化したといわれていますが、病を得てやむなく深谷に戻り、死期の近くのを知って遺戒をしたため、享保十六年（一七三一）十一月七日秀道院において六十五歳で入寂しました。

遺戒（秀道院蔵）の最後に

遺偈

六十五年　徒成悪辣

今日消尽　不徧界蔵

又『出語録』（秀道院蔵）の遺偈に、

「曽不会仏法、生涯為国賊、賊々、活堕黄泉」とあります。

むすびに

以上、甲斐の祖暁禅師の生立ち、経歴の概略について記しました。

幼少蛍の光を見てその原因を確かめようとして多くの蛍を殺し、その結果生死の神秘に疑問をいだき、七歳で仏門に入った真理を解明しようとする旺盛な研究心。又経学書など机上の学問を好まず、ひたすら坐禅修行に専念する理論より実行を重視した姿。

長ずるに及んでよき教導の師を求めて諸国を行脚止錫した求道心。得度の師に対する孝養。水難防止、新田開発計画の心の寄りどころとなり、郷里を離れ本多氏の招聘に応じた慈悲心。権勢に阿諛せず、自己の信念を貫いて井伊家の菩提寺清涼寺を去った態度。法話、遺戒にもあるように大衆、後輩の教導に日夜尽した努力など、その禅師の一生を省みる時、偉大なる人間性の一部分にふれたような気がいたします。

禅師は、晩年その法話の中で「今日家業の上、医術陰陽兵法の極意までも縦横に説示せん、一々問い将ち来れ、若し毫釐（いささか）も遅疑に渡り、渋滞するあらば我大妄語の人なり。又我神儒仏の至理を談じて錯誤なきを期す。吾答処該の道の要義に中らずんば吾先ず其妄語罪堕獄の報あらん、云々」と述べております。既に高僧の境地にあることがうかがい知られます。

清水玄透氏も「大奈良の太郎から彦根の清涼寺まで乗り出した天巌祖暁禅師は、伝説口碑を聞き、遺文墨跡に接するほどに、曹洞禅門の知識、豪邁酒脱の禅徳であったことを感じる」と述べております。

祖暁禅師のこと附記

祖暁 新田のこと

祖暁禅師が都留郡在住の頃は郡内領主秋元喬知（喬朝）公の時代であります。喬知は元禄十二年老中となり、宝永元年（一七〇四）十二月川越（埼玉）六万石の城主となりました。

当時は徳川幕府も安定し、諸大名は治山治水、産業の振興に力を入れ、財政の確保と領民の安堵に意を用いていました。

喬知も又祖先の意志をつぎ、新倉の掘貫工事をはじめ、多くの堰を開さくして水田を開発することに努力しました。

このような事業は救世済民を願う禅師の心に強い影響を与えたことが考えられます。

当時駿河の富士川、安部川、大井川などの下流は、大雨が降るごとに堤防が決壊して河水が氾濫し、その都度農民はなやまされました。

日本三急流の一つ富士川下流の堤防工事と沿岸水田の開発については、寛永元年（一六二四）甲斐より府中（静岡）五十万石に封ぜられた駿河大納言忠長（将軍家光弟）公が、古郡孫太夫を代官に登用してその責にあたらせました。

孫太夫の祖先古郷氏は都留郡小山田氏と親族関係で、かって甲斐上野原城の城主であります。

孫太夫は富士川下流の岩本村に移り住み、開発工事の任に就きましたが、忠長公がまもなく失脚したので工事は一時中絶するかにみえました。だが孫太夫は屈することなく私財を投じて開発し、寛永十九年には千百石ほどの土地が検地帳に登載されるほどになりました。

しかし、万治元年（一六六〇）の洪水により、新開地はすべて流失するほどの大打撃を受けましたが孫太夫は挫折しませんでした。

新開地を洪水から守るため強固な堤防工事を含めた新事業を展開しましたが、工事途中の寛文五年（一六六五）六十六歳で惜くも亡なりました。

この孫太夫の事業の後を引きついだのが、重政、重年父子であります。

ここで注目すべきことは開発の当事者が、事業のなみなみならぬ精神的苦悩の寄りどころとして、神仏を祈願信仰することでした。

重政、重年父子が工事の完成を願って人柱をたてたり、黄檗宗の僧鉄牛に帰依して鉄牛のために瑞林寺をはじめ多くの寺を建立したのもそのあらわれであります。

又孫太夫の時代、大井川の下流で新田開発をすすめていた代官長谷川藤兵衛は、旦那寺とは別に黄檗宗の白岩寺を建てて信仰しておりました。

本多信門も安部川下流の護岸工事と水田の開発に意をそそぎました。

安部郡領主本多氏について、『新訂寛政重修諸家譜』により嫡嗣をあげると、

一 本多光勝―二 忠光―三 信俊―四 某―五 信勝―六 信次―七 信賢―八 信門（式部、太郎左衛門、百助）―九 居信―十 據信―十一 居信―十二 信用、となっており、もと藤原氏兼通の流とのことですが、本多光勝（百助、平三）をもって独立して一門を形成しているようです。

『安部郡誌』によると、安部郡は寛永十年（一六三三）以後幕領となり、旗本の落合将監、本多信門らに知行され、寛保年間（一七四一―四三）再び幕領になったと記されてあります。

信門は、町年寄の友野与左衛門（秀道院文書に、遠州伊達方本所与左衛門とありますが、その人物見当らず）の献身的協力により、難事業に屈せず、『与左衛門新田』とよばれる水田を開発しました。

信門は、堤防工事と新田開発にあたり、安部郡藁科村字深谷の心光庵を深谷山秀道院（現静岡市牧ヶ谷）と改めて法地とし、甲斐より祖暁禅師を招聘して開山とし、与左衛門と共に深く帰依信仰しました。

又信門は、秀道院の寺領として新田を寄進しましたが、この肥田は後に『祖暁新田』とよばれ、与左衛門も鐘一口を寄進いたしております。

禅師は遺戒のはじめに、「老僧年来命を的にかけて危亡を顧みず、新に寺を建て、積年開田のことは偏に、是箇々面々仏祖の行履に住し、この事にいけずかせんことを願うの大願力なり云々」と述べております。

今秀道院の本堂に『前永平当院開山天巌祖暁大和尚禅師』の大位牌（高さ一メートル）と並んで、『当院開基得昇院殿香誉儀安山大禅定門』裏に「本多百助藤原信門、享保十二年未年閏正月二十五日」と記した大位牌が安置されてあり、秀道院の文書には「与左衛門の霊牌も信門の尊牌と共に安置されてある。」と記されてあります。

かがめ地蔵

都留市上谷大道（竜）山法泉寺（曹洞宗）は都留市羽根子長生寺の末寺で、開山は笑伝宗咄和尚、開基は明岳周光和尚です。

祖暁禅師は、元禄七年法泉寺第八世住職となり、禅風を鼓吹して同寺中興の祖とよばれました。

境内（現在十王堂に安置）に有名な屈め地蔵尊があり、裏に元禄十二年四月二十四日と刻まれてあります。

当地の伝説に、「法泉寺の境内で石屋さんが困って考えこんでおりました。用事をおえて戻ってきた祖暁禅師がその理由を聞くと、でき上った石地蔵を厨子におさめようとしたが厨子より地蔵の方が丈が三寸ほど高く、おさめることができず思案中とのことでした。

禅師は石地蔵さんの頭をなでながら、かがめや地蔵、かがめや地蔵といいますと、地蔵は少し頭をかがめ、めでたく厨子におさまったとのことです。

『甲斐国志』に、「元禄十二己卯年四月二十四日開眼ノ偈ニ言フ、汝元来大幡山ノ石、我ハ是久遠実成ノ仏、曲躬ヤ地蔵、曲躬ヤ地蔵ト、是レヨリ石像少シクカガメリト言ヒ伝フ」とあります。

この伝説は、祖暁禅師の徳が高く、法力のあらたかなことを、地元の人たちが石地蔵にたくして語り伝えられたものと考えられます。

元禄十二年は禅師が法泉寺に在住の時で、宝村上大幡の石をもって石工に命じて地蔵尊を刻ませたものと思われます。

それでは何故かがめ地蔵尊を刻ませたのでしょうか。このことについて推察いたしますと、

ほとんどの仏像が正面を向いているのに、一つだけ京都禅林寺永観堂の阿弥陀は、ふりかえっている姿のみ仏で、「みかえり阿弥陀」とよばれております。

いくら祈ってもうけ入れられない絶望に、生きた心もなくたち去って行く人に対して、ふりかえり呼びとめて深い心を結びつけてくれる仏の姿を現したものであります。

地蔵菩薩は民衆からしたしまれている慈悲の菩薩です。その姿に向って諸願をかける時、よしよしと深くうなづいてくれたならば、人々はどんなに心強く感ずることでしょうか。

禅師は石工に命じてうなずいている姿の地蔵を刻ませ、開眼したものと考えられます。

千丈勘破の真偽

祖暁禅師が加賀の大乗寺で参禅修行中（二十三歳頃）曹洞宗を代表して黄檗宗高僧千丈和尚を勘破（論破）して曹洞禅滅却の額を黄檗山万福寺（宇治）より持ち帰った話は有名です。（『彦根清涼寺記』にもこのことが書いてあります。）

高橋竹迷師は、秀道院の祖暁禅師の銅碑の碑文は清涼寺の祖暁禅師より二代前の六世住職東溟弁日和尚（長寿

な方）が禅師の他界二年後に建てた時撰をしたもので、信用できるとし、それによると祖暁禅師及び師の徳翁も、黄檗宗の参禅者であるから千丈勘破の事実はありえないと述べています。

又清水玄透師は、黄檗山は隠元禅師より六代目が千呆で、千呆は加賀の献珠寺に住しており、大乗寺と献珠寺は犀川をはさんで四キロほどの距離にあるので、千丈は千呆の誤りではないかとしております。

『千丈勘破の話』についての記録は、静岡市の秀道院と都留市の法泉寺で保存されてきました。

秀道院の記録については後載の如くですが、禅師が勘破した年の延宝五年（一六七七）は禅師が十歳の時になるので、勘破の年代が誤りであることが知られます。

又加賀大乗寺の住職は当時月舟宗胡禅師でなく、月舟禅師の法嗣にあたる徳翁良高禅師でなければなりません。

法泉寺の千丈勘破の記録については火災焼失とのことですが、清水玄透師が昭和三十六年『大法輪』十月号の中で「祖暁がはじめて住職となった法泉寺には、誰の筆になるものか、格調の高い漢文体で記された黄檗勘破の詳細な一条がある。」と述べて、漢文体を国文体に訳されてその内容が載せてあります。その概略を記しますので、後載の『祖暁禅師黄檗宗千丈勘破の話』と比較し参考にしていただきたい。

『三月十四日に行われた大夜参の茶話の席で、良高禅師は黄檗の宗風が甚だ広大であり「一人として今どきの雲衲は、他派を破折するやつは一人もいない」と語った。

そして更に、「黄檗宗の中でも濃陽に住んでいる千丈などは、実に機鋒に長じていて、いつも素柯の長刀で人を戒め、わずかでも人我にわたる点があると、真向から斬り捨ててしまおうとするほどだ。であるから並の手腕では相見することができないのだ」と申されたので、大衆はすっかり黙ってしまった。

そのとき、祖暁は雑務の役に服しながら修行していたまだ青年僧であったが、「私が行って千丈を勘破してまいりましょう。」と申し出たので一座は驚いた。

禅師は、お前ごとき者には到底及びそうにない千丈だ。やめよ、やめよと笑いながら「大鵬の心底、燕雀の知

るところではない」といわれる。すると祖暁は「私（燕雀）の心底は、大鵬の知るところでありません」と答えたので、禅師は手を拍って大笑して「この掠虚頭の漢」と言い残され、茶をすすって席を立たれた。

翌払暁、祖暁はまず侍者寮に行き、外出したいと申し出た。寂照侍者は千丈の許へ行くのだという祖暁の言葉を聞いて、やめたらどうだと諌めたけれども耳に入れず、飯頭（食事を司る役）に冷飯をもらって食べ終ると、ついで典座寮へこのことを報告しにいった。道林典座もまた無暴をやめさせようとしたが、頑として受付けない。典座はやむなく禅師の命令によって祖暁を留めさせようと方丈に行って仔細に意見を述べた。

典座は祖暁が危く思えてならなかったのだが、良高には何か見るところがあったのだろう。

やがて侍者と典座は祖暁の杖と笠を持って門まで見送って出たが、祖暁の力量を試そうと、つと門外に立った侍者は、杖を一つきして「如何なるか是れ行脚の眼目」と問いかけた。

祖暁は侍者から竹杖を奪い取ると、はげしい勢いで地上を一つきまた一つきしていった「理名昧跡二十六、甚麼の虚空界を喫す、看よ看よ大千沙界、転轆々阿轆々」

その声がまだ消えない中に、今度は典座が「作麼生か行履底」と問いかけた。祖暁はこんどは典座の手にもった笠を引き取って、「虚空一蓋の笠」と答えたかと思うと、いきなり門外に走り出た。

それでもなお不安を感じた典座は「彼はきっと千丈に斬り殺されるに違いない。われわれも一諸に行って、祖暁の死を見届けようじゃないか」と侍者に相談すると、侍者も「それがよい」と、二人は祖暁の後を追った。

ほどなく三人は犀川を望む断崖に到着した。すると典座はやにわに祖暁を抱きかかえ、深々と藍水をたたえた川につき出して「正当恁麼の時如何」と問を発した。

祖暁は言下に「犀川の水潺々」と答えた。

間髪を入れず「何れの処にか去る」と第二の問が飛んできた。祖暁は「白山、雪漫々」と平然として答えるのだった。

典座は胸をなでおろし、かつ喜びを禁じ得なかった。一行はいよいよ千丈和尚の会中に参ずることとなり、衆寮に入った。

「私どもは賀州大乗寺に住している良高の随身雲衲で、甲州の産祖暁等三人です。今日はるばる千丈和尚の尊顔を拝するため、光陰（時間）を惜まずこの山に登ってまいりました。どうぞ師に御披露くださいますようお願いします」と知随に申し出ると、知随は直ちに師に取次ぎ、再び祖暁たちの前に戻って来て、「山主は近年老衰し、ずっと隠居されております。しかし良高和尚の随身がわざわざお出になったのは定めし意のあることでしょうから、お会いしようと申しております」と告げ、祖暁の前に唐土の大朱盆を置くのだった。

祖暁は袈裟を身につけ、線香三本を大朱盆に載せて、うやうやしく差し出した。

室中には、正面の椅子に倚り、白い払子を手にして千丈和尚がおられた。その様子はかねて聞いていたように寛仁大度に見受けた。

和尚の左がわには、白柯の長刀を持って立つ者がいる。また両班（左右に並ぶ役僧）には十人が居ならび、両脇に立った侍者二人は、あたかも関羽、張飛のように逞しかった。

祖暁は線香を献じると大展三拝をはじめた。一拝ごとに両眼を瞋らして師の面を見つめつつ、香三寸の間に大展三拝を終った。

千丈は挨拶を返すと「汝の脚跟、甚麼のために転ぜざる」と言葉をかけた。

祖暁は五歩進み出て「某甲従来只是の如し」と答える。

千丈曰く「作麼生か道之行履の処」と

すると祖暁は威を奮って一喝した。

千丈和尚は「はじめて這の漢に値う」と祖暁を讃めるのだ。祖暁も「某甲もまた今日はじめて和尚の這の機あるを知る」と礼拝するのだった。

千丈和尚は手にした払子をなげすて「這裡に一法あり、われ今汝に付嘱す」と肯ったが、

祖暁はすぐさま脚でその払子をけとばし、「これ甚麼の破草鞋、甚麼の用をかなさん」といい、さらに「甲斐の祖暁、今千丈を勘破し了る」とするどく発すると、まっしぐらに衆寮へ帰って行った。

衆寮にやって来た知随は「老兄よ、食事を準備しましたので庫堂においでください」と案内したが、祖暁は「某甲はまだ空腹ではありません。師顔を拝することができ、無限の喜びを感じております」と謝辞した。そして商量（問答）の模様を記録して知随に告げたのち、暇を乞い、走るようにして帰途についた。』

江西院のこと

都留市金井千眼山江西院（用津院下隣）については、『甲斐国志』に、「開基ハ謙室益翁、天文五年丙申没ス、開山ハ長生寺三世一道光円禅師、祖暁和尚幼稚ノ時当寺ニ入リテ落髪ス、又宝永三丙戌年春法泉寺ヨリ当院ニ入院ス、進院衆ニ示シテ云フ、江西ヲ出テ扣ク五十三、還タ来リテ坐ス江西道場、看ヨ看ヨ江西ト湖南与ト、蔵ルニ処無シ大奈良ノ太郎ト、」

又江西退院の偈に、

「六月ノ閑夢酬ルニ足ラズ
熟処忘レ難シ是レ何事
忽チ望ム相陽ノ華厳山
還タ憶フ江西湖南ノ月、」

明治六年（一八七三）桂林寺に宝地区の小学校が開校され、翌年江西院に移されました。明治二十二年江西院は不幸にも火災にかかり、以後寺院の再建がなされないまま、昭和四十二年十月十一日、東京都八王子市長房町で現在福聚学園陵南幼稚園の園長山岸義弘氏が江西院新命を拝し、再建の悲願をかけております。

山岸氏は江西院第十九世住職にあたり、大本山総持寺法系三十四世中興禅師牧牛素童大和尚の曽孫にあたる方です。

長生寺の弁才天

『甲斐国志』に、「大儀山長生寺客殿ノ後ニ小池アリ、中に弁才天女ヲ安置ス、祖暁和尚開眼ノ偈ニ云ク、天真ノ弁才妙徳アリ、霊水沈々藍ニ接シテ青シ、一滴百千汲メド価ナシ、人間何ゾ知ラン這中ノ妙、後池ヲ埋メテ開山堂ヲ其ノ地ニ建テ、弁天ノ祠ハ後山ニ移シテ今ニ存セリ」と記してありますが、現在は火災で焼失したのか見当らないとのことです。

弁才天はもとはインドの神様で、河川をつかさどる神ですが、仏教の方に入って、弁才、音楽、財福、知恵をあたえる天女として一般に信仰されるようになりました。我国では、七福人の一人として福徳を増し、知恵を授け、長寿と財宝をもたらす神として広く信仰されております。

この神様は必ず琵琶をもち、これを弾じています。もともと河川のゆかりの神であるところから、日本でも弁才天の祠はたいてい水辺にあります。

法泉寺の万霊等

都留市上谷大道（竜）山法泉寺門前にある万霊等の文字は祖暁禅師の直筆で、側面は風化破損してさだかでありませんが、一方に「宝永二乙酉年八月彼岸日大竜山法泉寺現住天巖祖暁叟代立之者也」とあり、他の側面には「三界、州、雨、竹」と刻まれてあります。

祖暁禅師と甲斐の小達磨

都留郡夏狩村金鼇山宝鏡寺（都留市夏狩）の第十四世は大円覚舟禅師（甲斐の小達磨）であります。

大円禅師は都留郡初狩村の出身で承応二年（一六五三）に生れ、若い頃、水戸（常陸）祇園寺の開山心越禅師（明の杭州の人、延宝五年水戸光圀の迎えで我国に渡来する。）のもとで参禅修行し、後宝鏡寺の住職となりました。

能筆家で、現在同寺の本堂入口の柱に掲げてある聯額は大円禅師の書になるものであります。『甲斐国志』によれば、禅師に関係した寺宝五品が残されてあります。

国志に「十四世大円覚舟和尚、山門ヲ建立シ、此ノ僧宗意ヲ早ク得証スルノミナラズ、学才アリテ兼ネテ書ヲ善クス、世ニ甲斐ノ小達磨ト称ス、祖暁ト時ヲ同ジクシ、互ニ相謗議スト云フ、」と記してあります。

元文二（一七三七）丁巳年十月廿八日祖暁禅師より六年遅れ八十五歳（宝鏡寺過去帳による）で入寂しております。

祖暁禅師とは同宗の曹洞宗で、甲斐の小達磨とよばれるほどの才徳があり、共に能筆家でもあったので、若き修行僧の頃は、互によき修行相手であったと思われます。

祖暁禅師の書

祖暁禅師は『近世書家伝』にもとりあげられているほどの能筆家で、その書は都留郡をはじめ、戦時中及び終戦直後、骨董家を通して国中（甲府方面）にも流れ、広く愛好家によって所持保存されております。できるだけその筆跡をたずねて禅師の心琴にふれたいものです。

その書について二、三調査したものを紹介しますと、

都留市上大幡に住む安田五兵衛氏の蔵する禅師の書軸は「忍為徳不可及持戒苦行」とあります。「忍によって得られた徳は、僧侶が仏教の厳しい規則を守り、仏道を得るためにつらい修行をすることも、頭底それには及ばない」の意と思われます。

同所上大幡の安田泰清氏の所有する軸は、布袋(ほてい)の図に対して上方に禅師の画賛がしてあり、内容は「汝是布袋鼻孔吹鼻毛、咦(いい)、是何所為」と書いてあります。「鼻毛が音をたてている、深く悟(さとり)の境地にあるようであるがよくわからない」というほどの意でしょうか。

又都留市上谷法泉寺及び同市夏狩宝鏡寺には禅師の書いた「南無阿彌陀仏」の掛軸があります。

なお法泉寺に、「玄之月去泉州之門」の軸があります。玄之月は旧歴九月のことです。

甲府市丸の内耳鼻科篠原良雄先生の所有する禅師の軸には「色香をもうつ里か己していたつらにさかぬ花見るともいかにせん」とあります。

静岡市深谷の秀道院には禅師の書いた板額「光明峯照遍河沙」が本堂の内に掲げてあります。幼少の時螢の光に疑問をいだいて多くの螢を殺し、その結果生仏一如の根源を識得し、いつも衆生の心に変らぬ光を投げあたえてその進むべき道を示した禅師の姿を如実に現したものというべきでありましょう。